

【学生からの質問】

質問1：用語についての質問：真理値、メタ言語、実践的推論、同一性言明、陰伏的、(文、言明、命題の区別)  
回答：実践的推論（昨年の講義ノート12回をみてください）

質問2：原初的な問い合わせはあるのか？（回答：考えてみます）

質問3：「キャンプへゆきます」は約束であり、真理値を持たないとしても、「キャンプへゆくことを約束します」は約束することであり、かつ約束の記述でもあり、真理値をもつということはないでしょうか。

質問4：「 $5 + 7 = 12$ 」のような規約によって真理値が決まる命題の意味を主張可能性意味論はどう説明するのでしょうか。

回答：この等式（の意味）を理解することは、その証明を理解することだと考えます。（式の証明を与えることができないときには、証明が与えられたならば、それを理解できるということだと考えます（Dummett）。昨年の講義ノート（第三回～六回）を見てください）

質問5：焦点の違いがそのまま意味の違いに結びついているかは疑問です。命題が様々な文によって指示されます。かりに焦点の違いによって命題が変化とすると、命題は様々な文によって指示されるといえなくなります。  
回答：たしかに言明の焦点が異なっても、言明の真理条件には影響しません。しかし、おそらく主張可能性には影響するとおもいます。焦点が意味に影響するのは、問答関係や推論に影響をあたえることで証明できると思います。たとえば、

「なぜそのリンゴがここにある？」

この問い合わせは、焦点の違いによって、異なる答えを要求するのです。

「なぜ（他でもなく）そのリンゴがここにある？」

「なぜそのリンゴが（他でもなく）ここにある？」

質問6：返答が同一性主張にならないような質問の例

質問：「二けたの素数にはどのようなものがあるか」 答え「11」

ここでは、「二けたの素数=11」とはならない。

回答：質問は「二けたの素数の一例は何ですか」とパラフレーズできます。そうすると、答えは、「二けたの素数の一例=11」という同一性言明になるのではないかでしょうか。

質問7：質問、バイセクシュアルの人についての質問「あの人は女性か？」「はい、女性です」でも「女性でかつ男性です」

回答：質問の意味を曖昧でなくすれば、答えは一つになるのではないかでしょうか。

質問8：「問い合わせ現実認識と意図が矛盾するときに生じる、と言われましたが、この二つが矛盾するとはどういうことですか？これが論理的な矛盾ではない、とはどういうことですか？」

回答：次のような問い合わせを結論とする推論はごくありふれたものだと思います。

「私は癌にかかったかもしれない。」

「私は死にたくない。」

「私はどうしたらよいのだろうか。」

「私の会社はつぶれそうだ。」

「私は失業したくない。」

私はどうしたらよいのだろうか】

後者を例に考えましょう。この二つの前提

「私の会社はつぶれそうだ」と「私は失業したくない」

は直ちには論理的に矛盾しません。文のある集合が矛盾するとは、その全ての文が真になることがない、と言うことです。一文の場合には、矛盾するとは、「 $p \text{かつ} \neg p$ 」という形式の文に書き換え可能であるということです。この二つの文は、ともに真でありえます（両立可能です）。

私が、「私の会社はつぶれそうだ」から「私は失業しそうだ」を導出できるとしましょう。

「私は失業しそうだ」と「私は失業したくない」

もまた、矛盾しません。これらは、ともに真であることがあり得ます。

ここで次の反論をする人があるかもしれません。

<「私は失業したくない」は表現型発話（サール）であり、真理値を持たない。したがって、真理値を持つ命題と矛盾することはありえない>

しかし、表現型発話も主張型発話と、論理的な矛盾や整合性の関係をもちます。ここでの「私は失業したくない」という表現型発話は、「私はまだ失業していない」を前提します。そして、この前提と「私はすでに失業している」という事実認識とは矛盾します。しかし、この前提は「私は失業しそうだ」とは矛盾しません。

では、次はどうでしょうか。

「私は失業しそうだ。私は失業したくない。しかし私は何もしない」

「私は失業しそうだ。私は失業したくない。しかし私はどうしたらよいのか問わない」

これらの文の集合は、矛盾するでしょうか。これらの文の集合からは「私は失業してもよい」が帰結するように思われます。すると、次が帰結します。

「私は失業したくない。私は失業してもよい」

これは矛盾するでしょうか。

---

これとよく似た次の例を考えましょう。

「私はケーキを食べたい。私はケーキを食べたくない」

この二つの欲求は、論理的には両立可能であり、現実的にも両立可能です。しかし通常は、この二つの欲求は矛盾していると言われます。なぜなら、この二つの欲求を同時に満たすことが、論理的にも現実的にも不可能だからです。

ただし、二つの欲求を同時に実現することが論理的に不可能であっても、そのような二つの欲求を持つことは論理的にも現実的にも可能です。つまり、次の発話は矛盾しません。

「私はケーキを食べたい。かつ、私はケーキを食べたくない」

次の二つはどうでしょうか。

①「私はケーキを食べたいと考えている、かつ、私はケーキを食べたくないと考えている」

②「私はケーキを食べることを欲する、かつ、私はケーキを食べることを欲しない」

①は矛盾しませんが、②は矛盾するでしょう。

---

「私は失業したくない。私は失業したい」

これならば、ケーキの場合のように矛盾した二つの欲求をもつことになります。

「私は失業したくない。私は失業してもよい」

では、これは矛盾するでしょうか。つぎのようにパラフレーズできるなら、矛盾します。

「私は失業しないことを欲する。私は失業しないことを欲しない」  
しかし、このようなことは、現実にもあり得るだろう。  
「私は勉強しなければならない。私はTVを観たい」  
アクラシアの問題と関係している。

### 【前回講義の復習と補足】

論点1：問い合わせがもつ陰伏的な条件は、問い合わせを構成する理論命題と意図表明命題がもつ陰伏的な条件からなる。これらの命題の理解の陰伏的条件は、それが答えとなる問い合わせとの関係において明示化される。このプロセスは無限に反復可能である。したがって、質問にせよ、その他の言明にせよ、多くの場合、言明の意味の完全な明示化是不可能である。

### 論点2：テーゼ「問は事実認識と意図の矛盾から生じる」

実践的な問い合わせについての証明は簡単だろう。理論的な問い合わせもまた、事実認識と意図の矛盾から生じることをどう証明すべきだろうか。(課題として残っています)

### 論点3：テーゼ「問い合わせもまた、推論の結論である」

理論的な問い合わせの例

前提1 私はAを知りたい。( $=?A$ )  
前提2 私がAを知るためにには、私はBを知る必要がある。  
結論 私はBを知りたい。( $=?B$ )

これは、通常の推論ではないが、妥当な推論であるように思われる。この推論は、「実践的推論」の一種である。

実践的な問い合わせの場合

前提1 私は、私と学生の生命の危険を避けたい (意図)  
前提2 南海大地震が起きたら、様々な危険が発生する (現実認識)  
結論 私は「南海大地震が起きたら、私はどうするべきか?」を知りたい (意図)

この推論もまた、実践的推論である。ここでも、現実認識(前提2)と意図(前提1)から、実践的な問い合わせが生じているが、この場合にはこの二つは矛盾していると言える。実践的な問い合わせも理論的な問い合わせも、現実認識と意図を前提とする実践的推論の結論として生じている。

### 補足1：理論的な問い合わせを結論とする推論は、次のように考えた方が簡潔である。

「 $5 + 7 + 7$ はいくつか」  
「 $5 + 7$ がいくつか分かれれば、 $5 + 7 + 7$ がいくつか分かる」  
「 $5 + 7$ はいくつか」

### 論点4：テーゼ「問い合わせを結論とする推論もまた、別の問い合わせに答える目的で可能になる」

私たちが推論するには目的があり、その目的が論理的に可能な多数の結論の中から一つの結論に限定し、推論を実現する。その目的は、問い合わせの形式で与えられ、推論の結論は、その問い合わせの答えとなることが求められる。

#### ■理論的な問い合わせの例

前提1 私は、 $5 + 7 + 7$ がいくつになるのか、を知りたい。( $=?A$ )  
前提2 私が $5 + 7 + 7$ がいくつになるのか知るためにには、私は $5 + 7$ がいくつになるのかを知る必要がある。  
結論 私は、 $5 + 7$ がいくつになるのか、を知りたい。( $=?B$ )

前提2は厳密には正しくないように見えるかもしれない。なぜなら、 $5 + 7 + 7$ を $5 + (7 + 7)$ と考えて、 $7 + 7$ をまず計算する方法もあるからだ。また、もし「私」が何らかの事情で、 $5 + 7 + 7 + 7$ の答えを知って

いるとすると、その答えから7を引くことによって、 $5 + 7$ の答えを求める事もできる。つまり、この前提是、問う者の知識状態に依存しているのである。

ここでは、問う者が、前提2が成り立つような知識状態にあると仮定してほしい。(ここでの知識状態と前提2との関係をどのように記述し分析できるか、ということは、有意義な研究テーマになりそうだが、ここではスキップ)

この推論が成り立つには、別の問い合わせが必要である。なぜなら、前提をみとめても、そこから一つの結論だけが帰結するわけではないからだ。これを上記の例で説明しよう。

前提1 私は、 $5 + 7 + 7$ がいくつになるのか、を知りたい。 $(=?A)$

前提2 私が $5 + 7 + 7$ がいくつになるのか知るためには、私は $5 + 7$ がいくつになるのかを知る必要がある。

この二つの前提を仮定するとき、そこから論理的に帰結する結論は、次のようなものが考えられる。

結論1 もし私が $5 + 7 + 7$ を知っているなら、私は $5 + 7$ を知る必要がない。

結論2 もし私が $5 + 7$ を知りたくないなら、私は $5 + 7 + 7$ を知りたくない。

結論3 私は $5 + 7$ がいくつになるのかを知りたい、あるいは、私は $5 + 7 + 7$ がいくつになるのかを知りたくない。

結論4 私は $5 + 7$ がいくつになるのか知りたい。

他の結論でなく結論4を推論の結論として導出するのならば、なんらかの理由があるはずその理由は、一般的には次のように言うことができる。私たちが推論するには目的があり、その目的が論理的に可能な多数の結論の中から一つの結論に限定し、推論を実現する。その目的は、問い合わせの形式で与えられ、推論の結論は、その問い合わせの答えとなることが求められる。

この例の場合には、その問い合わせは、つぎのようなものになるだろう。

「 $5 + 7 + 7$ がいくつになるのかを知るためには、私はどうすればよいのか？」

## ■理論的な問い合わせの例

「 $5 + 7 + 7$ はいくつか」

「 $5 + 7$ がいくつか分かれれば、 $5 + 7 + 7$ がいくつか分かる」

「 $5 + 7$ はいくつか」

この推論を可能にする問は、例えば次のようなものである。

「 $5 + 7 + 7$ がいくつになるのかを知るには、ひとはどうすればよいのか？」

## 【補足2】疑問文ないし質問発話の意味についての見通し

(1) 疑問文ないし質問発話の意味を「真理条件意味論」(Davidson)や「主張可能性意味論」(Dummett)で説明することはできない。なぜなら、疑問文や質問は、真理値を持たないし、主張可能でもないからだ。

(2) 疑問文ないし質問発話(の意味)を理解するとは、<それが相手にどのような情報提供(「これはなにですか」)や意思表明(「キャンプに行きませんか」)を求めるのか>を理解することである。それゆえに、ここでは「意味の使用説」や「PRAGMATICな意味論」が適切である。

(3) 「推論主義の意味論」(Brandom)は有望だとおもうが、「推論」の理解を拡張して、推論を問答関係の中で可能になるものとして理解し、かつ問もまた推論関係の中で成立すると考えたい。

参考文献 : ANDRZEJ WISNIEWSKI, 'THE LOGIC OF QUESTIONS AS A THEORY OF EROTETIC ARGUMENTS'

